

---

# あの日この場所で

赤森 尚太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの日この場所で

### 【Nコード】

N3618R

### 【作者名】

赤森 尚太

### 【あらすじ】

ある日、親戚の家を訪れた主人公は、とあることからその町一番の富豪の家に住むことになって…。

## プロローグ（前書き）

とりあえず書いて見ました。ほとんど趣味なので、辛い感想もガ  
ンガンどうぞ！

でも、馬鹿にするのは勘弁してください。

## プロローグ

いまぼくのめのまえには、おっきなすなのとうがあります。

じかんはわかりません。ここはいつものこうえんで、めのまえにはすなのとうがあつて、そのむこうには、いつもいっしょにあそんでいるおんなのこがいます。するとかのじよは、ぼくにききました。

「おおきくなつたら、けっこんしてくれろ?」

ぼくは、なにかをこわがっているかのじよに、わらいながらいいました。

「もちろん!」

かのじよはとてもよろこんでいました。ぼくもうれしくて、ギューをしてみました。かのじよもギューをかえしてくれて、またうれしくて、とつぜんあめがふってくるまで、ずっとギューをしていました。

## 1話 1

朝のやわらかい日の光がカーテンの隙間から入り込み、俺は静かに目を開けてみた。ベッドはとてもふかふかで、開けたはずの目を再び重くする。どうせ今日は日曜日、久しぶりの二度寝も悪くない。

俺は夢の世界へ旅立つ…「早く起きろおお!!」

てませんではぶるあつっ！突如、鉄拳の嵐が俺を襲った。

「おいおい、昨日まではメイドさんが優しく起こしてくれたのに、何で今日は拳なんだ？」

「死ねばいいと思うよ」

マスターキーを使って、泥棒のごとく俺の部屋に入ってきた少女、山城葵は全く悪びれる様子もなく、そう告げた。今の会話から分かるように、彼女はとても機嫌が悪い。まず彼女と会話を成立させるためには、まず機嫌を取らなきゃいけない。なので適当に、

「お前って可愛いよな」

と褒めてみた。

「ちよっ…くっ…」

葵は、赤面してあたふたした後、はつとして俺に殴りかかってきた。拳は、俺の目に止まらない速さで俺の顔面に到達し、見事に炸裂。俺は、無事に夢の世界へ旅立つことが出来た。

## 1話―1（後書き）

誤字脱字等ございましたら遠慮なくご指摘ください。

## 1話―2

俺、神崎守が山城家で生活をするようになった理由は、実はとてもシンプルなものだ。

数日前、俺は親戚の家を訪れた。5年前までは1年に1回のペースだったのだが、いろいろあって実に5年ぶりだ。

5年ぶりだったが、町の景色はあまり変わっておらず、親戚の家はすぐに見つかった。古い日本屋敷で2階建て、庭が一般家庭の約5倍。やはり2年前と変わらない。

俺の親戚、本田家は昔からこの地に住んでおり、地元では結構有名な家だ。そして、その家には俺の叔父とその妻、従弟が暮らしている。この家は農家なので、毎年俺が手伝いに来ているというわけだ。

「お邪魔します…」

そう言っただけ戸を開けた。すると、懐かしいにおいがして、つい昔のことを思い出してしまった。

「あら、守ちゃんじゃない。懐かしいわあ、確か5年ぶりよねえ？」  
と思いに浸ろうとしたところに叔父の妻、本田信江さんが姿を現した。

「信江さん、こんにちは、お邪魔してます」

「うわあ、声変わってる！大きくなっただねえ」

信江さんと最後に会ったのって、確か小6の時だったしな。

「あれ？叔父さんと孝也は？」

「今、ちよつと出掛けるのよ。でもおかしいわねえ、かれこれもう2時間よ？近くのスーパーにしてはおかしいわ…」

「2時間も！？俺、行ってきます！」

「いいえ、悪いわ。あがつてくつろいでてちょうだい」

「大丈夫です！確か近くのスーパーでしたよね？行ってきます！」

「ああ！もう」

俺はこうして、懐かしの本田家を後にした。まさかこの行動が、あんなことを招くだなんて…誰が想像できただろうか？

### 1話―3(前書き)

誤字脱字等ございましたら、ご報告ください。

すみません、長々と書いてしまいました。しかし、書ける分は書いておこうと思っております。

まあ近くのスーパーといえばあの場所だろう、と思ってとびだした俺であったが、とりあえず行つてたどり着いたその場所は、スーパーの『ス』の字も見当たらない空き地だった。俺は自分の記憶力に問題があることを悟った。しかし、そうではないらしい。

「あーそのスーパー、とつくに潰れてるわよ？あーあそっか、潰れたのって三年前のものね。知らなくてもしょうがないわね」

俺のかけた電話の相手、本田信江さんはそう言った。携帯あるなら、それで叔父さんと孝也に連絡とれよなんて思うかもしれないが、生憎二人とも、携帯を持っていない。本田家で携帯を持っているのは信江さん、ただ一人。だからこうしてさがしまわっているのだ。とりあえず、スーパーの場所を教えてもらった俺は、そこへ行つてみることにした。

「うわあ、すげえ」

五年前、田んぼや畑しかなかったそこは、見事なショッピングモールに変わっていた。どんなものかと、気になって西口から入ろうとしたときだった。かすかに聞こえたそれが、悲鳴だとわかった俺は、その場からすでに駆け出していた。

「なにやっつてんだ!!」

四人の高校生くらいの男達がいた。そいつらは八十くらいの老婆を囲み、バッグを掴みとろうとしていた。

「ああ？この婆さんが金くれるっつうから、有り難くちようだいするところだったんだけど？」

「さっき悲鳴が聞こえたぞ？」

「気のせいだろ？」

「た、助けて」

俺と高校生が話していると、怯えていた老婆は小さな声でそう言った。

「このっ！」

高校生はいきなり手をあげた。それを見た俺は、何かがきれ、全力で走り、驚いて反応の遅れたそいつの頬を蹴り飛ばした。そしてその後動くことはなかった。

「てめえ、何す…！」

態勢を立て直し、二人目には鋭い右フック喰らわす。すると、すぐに白目を剥いて倒れた。そしてすぐに戦闘態勢に戻ったが、三、四人目が襲ってくることはなく、悲鳴をあげ、逃げていった。

「大丈夫ですか？」

「…えっ？ええ」

俺が問うと、老婆はやや遅れて返事をした。

「帰り道、送りましょうか？さっきのやつら、また来ないとも限らないですし…！」

そう言ったとき、俺は先刻の自身の暴力について思い出した。肩が震え、鳥肌がたった。

「どうしたんですか？」

老婆が不安げに尋ねてきた。いかん、こっちが心配されてどうする！

「い、いえ何でもありません。では、家まで案内してください」

「…分かりました」

老婆は一度迷った後、まるで覚悟を決めるように承諾した。

この時、俺は勘違いをしていた。覚悟を決めるべきだったのは、俺自身だったということ。

それは、あまりにも辺りの風景に合っておらず、それだけが、まるでひとつの世界として存在しているかのようだった。

俺が老婆に案内され、ついたその場所は、何かもう、すごかった。普通に豪邸だった。豪邸なんて、ドラマや、アニメの世界だけかと思ってた。しかし、それが今現実として目の前に存在している。俺は多分興奮している。カメラがあつたら、迷わずシャッターをおしたはずだ。

「ここです」

「すげえ…」

そんな言葉しか返せなかった。そして、そのまま戸（？）を開け、中へ入った。最初に目に入ったのは五、六人のメイド達。なにやら忙しい様子で走り回っている。メイド達はこちらを見た。俺と老婆を見て、そのままこちに走りだし、迷わず俺を蹴り飛ばそうとした。そうとした、というのは俺が身の危険を感じ、事前に避ける動作に入り、攻撃をかわしたからだ。

「おい、あんたいきなり何すんだ！」

俺は叫んだ。予想していたとはいえ、ビックリだった。すると、またメイドが俺に襲いかかろうとした。不意に

「止めなさい」

短く、鋭い声が響き、その場にいたすべてのものを停止させた。

「このお人は、私を救ってくださいました方です。皆彼に謝りなさい」

この一声によって俺の扱いは、不審者のそれから恩人のそれへと変わった。

「さあ、あがってください」

「いえ、俺の役目は終わりましたし帰らせてもらいます」

俺がそう言い、立ち去ろうとしたとき、老婆はいつの間にかいた執事に耳打ちしていた。執事は驚きながらも首を縦に振っていた。

「お待ちください！」

振り向くと、すでに数十の使用人に囲まれていた。そのうち一人が襲いかかってきたため、回避しようとしたが、両わきから肘打ちをくらい、腹への一発がきまり、俺は意識を失った。

## 1話―4（後書き）

やっと、次話で一話が終わりそうです。一話が終わらないと本編始まりませんからね。頑張りたいと思っております。

## 1話―5(前書き)

遅れました。すみません。誤字、脱字ございましたらお知らせください。

## 1話―5

（あれ？ここどこだ？）

目が覚めた俺の視界に入ってきたものは、自分の部屋には置いた覚えのない壺だった。

（そっか俺、確か腹殴られて…）

見知らぬ部屋のふかふかベッドに寝かされていたわけだ。

くそ、腹痛え…。いくら喧嘩慣れしていても、さすがにあの数は反則だ。素人が相手なら何人だろうといける。だが、全員が格闘技を使えるあの状況で勝てというのは、素手でサメに挑めと言われるくらいキツイ。

とはいえ負けは負け。今は相手に従うしかない。

何で老婆を助けた俺が、大人数に殴られなきゃ（実際殴ったのは三人）ならないのか。

戸が開いた。すると、可愛い（守基準）メイドさんが入ってきた。

「お、お嬢さまがおよびです」

「…」

俺は無言で従った。

階段をおりると、ドでかいトビラがあった。

「お入り下さい」

「…」

可愛いメイドさんを目の前にしても、俺は終始無言だった。俺なりの抵抗だ。

トビラを開けた。

中には、メイドが一人と、ババア一人。いや、奥にもいるな。あれは…。

（綺麗だ…）

思わず凝視してしまう。流れるようなロングヘアに、魅惑のプロポーシヨン。俺は、今までこんな人をテレビ以外で見たことがな

い。

「あなたには、葵の婿になっていたいただきます」

『はあ!?!』

老婆の物言いに、俺と美少女は息の合ったツツコミをした。

「嫌です」

無理はない。俺だっていきなりこいつが嫁と言われたらきつと同じ反応をする。

「こんな暗そうな人と…」 畜生!これ今まで直球で言われたことなかったのに!!

「いいえ、決定事項です。異論は認めません」

「俺の意志は?」

俺の意志は完全に無視され、葵とかいう奴の婿(仮)となったのは、夏休み終了五日前のことだった。

小話〳〵本田家より〳〵

守ちゃんが帰って来ない。夫と孝也が、新しくできたアミューズメントパークから帰ってきてから、およそ二時間。少し心配になってきた。

「大丈夫だよ。守君はきつと無事さ」

「でも…」

夫は、なぜこんなに冷静なのだろう。

すると、後ろからドラマのテーマソングのワンフレーズが聞こえた。

携帯を取りだし、電話にでる。相手は守ちゃんだった。

「信江さん…俺、帰れないっす。ついでにこっちに住むことになりました。…うげ、見つかった!それじゃまた!」

「ちよつと!」

切れた。

それにしても、一体どういうことだろう？、言っていることを、何一つ理解できない。

私が、この事について詳しく知ることができたのは、守ちゃんの手記が見つかった時だった。

## 1話―5（後書き）

山城家はあくまでもイメージです。  
お金持ちがみんなこんなとは限りません。

## 2話 1

転校初日、転校したことがある人もない人も、そこから感じられる緊張感は半端じゃないことは分かるだろう。

だから今日、俺、神崎守は初めての転校生気分、少し戸惑っている。しかも転校時期が、三年の二学期だ。

そして、俺が何故転校生について語ったのか。それについては、つい五分前のやりとりを、見ていただきたいと思う。

（五分前）

「よう、さすがに始業式に休む奴なんて、さすがにウチのクラスにはいねえみてえだな」

ちよつと親しみ安い先生みたいだ。

俺は今、教室の前にいる。

「この時期だが、転校生を紹介しよう」

ついに定番か。うわっ、変に緊張するな…。

「さあ入ってこい！山城の夫！」

頭痛い。凄く帰りたい。そう思いつつ教室へ入った。

女子は最初目が輝いていたが、俺を見るなり半分以上がっかりしていた。男子は…ほぼ全員から殺意を感じる。

「神崎守です。これからよろしく」

取り敢えず自己紹介した。一応良い印象を与えるために、何かギヤグでも言った方がいいか…？

「どういうことだ！？山城の夫と聞いたからには、もっとカッコイイ奴かと思ったのに！！なんだ？この地味なのは！？」

誰が地味だと…この野郎…！とは言えないので、微笑してみた。

さっきの男子…誰だか分からねえから、仮にA君としよう。Aは俺の胸ぐらを、おそらく手加減抜きで掴んできた。

「あのさ、ちよつと離してくれる？」

できるだけ下手に出てみる。

「うるさい！何故俺じゃなくて、こんな奴なんだよ！」

Aは叫んだ。いろいろツツコミたい。だが、彼はこれ以上ないくらいに冷ややかな視線を浴びていた。

クラスメイトは、間違いなくAはやり過ぎだと分かっているようだった。

と、突然口に刺激が… Aが俺を殴ったみたいだ。

というか先生、これ止めてくれよ！

「ほら、かかってこい！転校生！！」

「先生、やってもいいですか？」

俺がそう尋ねると、先生はオツケーのサインをしていた。

(これは仕方ないものだ。決して暴力じゃない…)

自分にそう言い聞かせ、Aの顎を約一秒で粉碎した。

## 2話 1 2

「あなたって、本っ当にバカですね」

時刻は午後一時。早めの下校なので、テンションはわりと高めだ。しかし、その帰り道、神崎守は山城のお嬢様に盛大に罵倒され、徐々に気力を失っていった。

「…それについて弁解するつもりはない」

転校初日、俺はクラスメイト一名を病院送りにした。

当然、何かしらの罰があるはず、と覚悟していたのだが、なかった。

気絶させた直後、俺も気を失い、倒れた。

そこから先のことは、覚えていない。が、俺の知らないところで、何かあったのかもしれない。

「はあ…どうでもいいけど、心配だけはかけないでよね」

「え？お前心配してたの!？」

まだ夏休みだった時にわかったことなのだが、山城葵は人に対してかなり冷たい。

今回もなんとも思われていないのかと思っていたので、とても驚いた。

あっ！なんか急にイタズラ心が。

よし、いっちょよからかってみるか。

「そうか、お前…そんなに俺のこぶらあっ!」  
殴られた。

「あまり変なことを言うと、殴りますよ?」  
殴った後に言われても…。

「そっぴや、お前何組だったっけ?」

「…言ってますでしたか?五組ですよ」

「ああ、やっぱ聞いてない」

これからは、五組に近寄らないようにしよう。恐いし。

なんて話をしていたら、いつの間にか家に着いていた。  
人とこんな話をしたのは、あいつら以外とは久しぶりかもしれ  
ない。

## 2話 3

痛ってえ。あいつ本気で蹴りやがった。

場所は、風呂。何があつたかなんて、すぐに想像がつくと思う。

ずっと前にあがつたはずの葵と、裸のご対面をしたというわけだ。その瞬間あいつ、顔を真っ赤にして、俺の脛を蹴りやがった。理不尽だ。

「上がるか」

俺は、バスタオルを腰に巻き、風呂場を出た。

リビングと思われる部屋に入った。

葵がいた。

殴られた。何故だ…？

「上着を着ろ！」

「はあ？何で？」

「恥ずかしいからだ！」

なんだ、そういうことか。

あと些細なことだが、口調が変化しているだろう？こいつは、家の中と外では口調が変わるんだ。

面白いだろ？

「今、何か失礼なこと考えた？」

「そんなわけないじゃないかhahahaha」

女はエスパー。

## 2話 4

登校二日目。

俺は教室に入ると、何故か魔王を倒した勇者の如く讃えられた。

「どうしたの？」

「いや、ありがとう。三村君を入院させてくれて」

「え…」

話を聞いたところ、どうやらAこと三村君は、このご時世にガキ大将を気取っていたそうだ。

更に迷惑だったのは、税金という名目で、金を巻き上げていたことだ。

その三村君を、俺が懲らしめたため、感謝されているわけだ。

しかし、どう感謝されても、俺の中から暴力の二文字は消えることとはなかった。

老婆を助けた時の暴力は、あくまでも人のためだった。

だが、今回は違う。

俺が自らの身を守るためにしたものだ。感謝される資格などない。昨日の俺は、まるで『あの頃』の俺だ。思い出すたびに吐き気がする。

「おつす、HR始めるぞ」

担任が入ってきた。どうやら、俺はチャイムに気づかなかったみたいだ。

「あ、神崎」

「は、はい…」

「昨日はすまなかった。そして、ありがとう」

「え…？」

昨日のことらしい。

それは、軽いノリで暴力を許可したことに対する謝罪と、生徒達から受けていた相談の、一時的な解決への感謝だった。

「正直、あの時俺は、どうするべきかわからなかった」

その時、本当に、本当に少しかだけ楽になれた。

「それと、お前らにビッグニュースだ。なんと！このクラスに新たに一人メンバーが増えるぞ」

さつきとは打って変わった元気な声でそう言った。

まもなく、戸が開いた。

「万丈目咲と申します。よろしくお願いします」

突如、男子の中に電撃が走る。

可愛い。

それが、みんなの考えていることだろう。

守ってあげたくなるような、そんな感じだ。

しかし、俺には別の衝撃があった。

「咲ちゃん…？」

「え…守くん？」

間違いない。この呼び方は、咲ちゃんだ。

そこには、昔、年に一度しか会うことのできなかつた友達、咲ちゃんがいた。…あまり記憶がないのだが。

咲ちゃんは、八歳のときに引越した。

理由は聞いていない。

だが、十年経った現在、咲ちゃんは帰ってきた。

それはとても嬉しい。「やだなあ、お互いいい歳なんだし、名前は呼び捨てにしようよ」

「そうだね。えっと…咲」

「それじゃ…守」

そんな、カップルみたいなやりとりをし、咲は、自分の席についた。

ヤバイ、めっちゃ恥ずかしい！

…あれ？確か宮本君だったっけ？彼、縄持ってこっち見てるんだけど！あの縄、何に使った？

…秋山君は目が血走ってるし。

よく集中すると、周りから殺気が感じられた。

（よし、逃げるか。）

HRの終了後、19VS1の鬼ごっこが幕を開けたのだった…。

## 2話―4（後書き）

この前、私がちょっと昼食を買いに出掛けた時のことです。  
会計のレジで、店員に、

「弁当は温めますか？」

と、聞かれたので

「お願いします」

家が近いので、とりあえず頼んでみたのです。

「ちっ」

舌打ちですね。びっくりしました。

どんだけ面倒臭いんだよ！と、叫びそうになりました。

以来、私は菓子パンを買うようになりました。

## 2話―5（前書き）

すみません、血だけは嫌だったんですけど。どうしても必要だったので柔らかめに描写しました。

## 2話―5

何故だ？何故こうなった？

ここは公道のド真ん中。

俺はそこに正座させられている。

しかも、目の前には美少女が二人。なにかを言い合っている。

事は俺が咲を誘い、一緒に帰っているところを葵に見られたことからはじまる。

葵は俺達を見た瞬間、口を開けて驚いていた。

まあ、俺がまだ慣れていないであろうこの土地で、友達と歩いていたのだから、確かに驚くだろう。

しかし、何故正座？

「あのう」

『黙ってて！』

「はい」

シンクロしてるし。

俺が抗議しようとしてもこの通りだ。

「どうしたものか…」

暇だし、盗み聞きでもするか。

「だいたい、守が悪いのよ！」

なんですと!？

咲さん、一体どういことですか！

「私もそう思います」

お前もか葵！

この後、俺は二人に奢らされた。

ちなみに 葵、お前金持ちだよな？ と、聞いたところ

「お小遣いはないから」

という返事が返ってきた。

ああ、我が愛しきマネー達よ…。

「ふう、いっぱい遊んだね！」

「ああ、そうだな」

ゲーセンを出たとき、ふとそう言われた。

俺の財布の中は…札が一枚入っていない。

明日発売のゲーム、どうしよう…。

でも、

「面白かったですね。またやりたいです」

「うん、私も」

たまにはこういうのも悪くないな。

「すっかり暗くなっちゃまったな…早く帰ろう」

「そうだね。ありがとう、守。とっても楽しかった！」

「私もです」

「きゃあ！」

「咲っ!?!」

振り向くと、

「よお、一日ぶりじゃん。転校生くん」

「三村…?」

昨日病院送りにしたはずの三村君がいた。

おかしい。こいつは、俺が顎を砕いたはずだ。こんなに早く復活出来るわけがない。

「咲を離せ!」

「嫌だ。代わりと言っちゃ難だが山城を渡せ」

こいつ、二発目を喰らったら気絶じゃ済まないぞ…!

「はっっ」

三村の手が咲の内股へと向かった。

俺は普段ならここでキレて、奴を殴るだろう。

しかし、足がすくんだ。殴っちゃ駄目だ!!

駄目だ。また暴力に走ったら…俺は…！

「たす…けて…！」

「…っっ」

でも、限界だ。

これ以上苦しむ咲を見てられない！

「お？やつとやる気になったか？」

「…何処にする」

「はあ？」

「足にしよう」

「てめえ、調子に乗るなよっ！」

瞬間、鮮血が地面を染める。

アキレス腱を切断。

いや、決りとつたんだ。「お前、歩けない。どうする、まだやる

か？」

「ひいいい」

三村は戦意を無くした。

だが、逃がさない。

「もうやめて…！」

二人の間に第三者の声が割って入った。

葵だった。

「もう…やめてよ…！」

そこで、ようやく我に帰った。

「俺、またやつちまったのか」

はは、こつちに来てもう何回目だよ…畜生！

気絶した咲と、頭を抱えてうずくまる葵、歩けない三村を残して、

俺はその場を後にした。

## 2話―5（後書き）

前回の後書きで体験談を試してみました。

これからも何度か書くかもしれませんが、どうぞよろしくお願  
い  
します。

## 2話―6

最悪だ。

暴力を振るった。

絶対しないと誓ったのに。

走った。

ただただ、夢中で走った。

ひたすら自分の心を沈めようとして。

俺はなんて弱いんだ。

力なんかじゃない。

本当の強さが欲しい。

昌志、恵美：俺って本当に弱いよな。

「や、やめてくれえ！」

目の前にはおっさんがいる。

どうするかって？決まってるんだろ。

「金、全部置いていけ」

「は、はい」

俺は神崎守。中学校なんてもう行っちゃいない。

そう。こうして毎日おやじ狩りをするのが俺の日課だ。

「どうぞ」

「…」

ちっ、むかつく。ペコペコしやがって。

心ん中じゃ散々悪口吐いてるくせに。

「むかつくんだよ！」

顔面に一発、蹴りをかました。

おっさんは倒れ、白目を剥く。

金を持ち、その場を去ろうとした。

しかし、

「おい、お、お前その金置いていけ」

「ああ？」

そこにいたのは、細い体つきの俺と同じくらいの歳の男だった。

いや、もう一人いる。

電柱の陰に女が一人。

気に入らねえ。

「潰す」

「へ？」

俺は一瞬で男の背後に廻り、頭を拳で強打した。

つまらん。

どうせ、彼女に良いところを見せようとしてもしたんだろう。

だが、相手が悪かったな。俺は素人でもまぐれで倒せるような相

手じゃない。「昌志！！」

突然、女が電柱の陰から飛び出してきた。

男に駆けよったが、無駄だ。さっきのあれは、完全に気絶するレ

ベルだったからな…。

「うう」

「！」

馬鹿な。男が動いた。

「くそつ頭痛え」

「お前、何なんだよ…」

「ただの中学生だよ」

「何で立ち上がる…？」

俺は問う。

理解できなかったから。「こいつに心配かけたくなかったからだ

よ」

そう言いながら、男は女と抱き寄せた。

心配かけたくなかった？

じゃあ、何故、俺の家族はみんな俺に心配をかけ、眠ったまま起きなかつたんだよ!!

父さんも、母さんも、姉さんも!!

何でだよ!!

ふと、頬に暖かさを感じた。

「何があつたの？」

女だ。

手を俺の頬に当てている。

「何にもねえよ」

「じゃあ、何で泣いている？」

「はあ…？」

女が手を離れた。

手の上のそれは、月の光を反射し、きれいに光っていた。

「話してみて」

「う…うう」

俺は話した。

家族と旅行に行き、飛行機が墜落。結局生き残ったのは、俺だけだったことを。

「…ねえ、君私達と友達にならない？」

「俺もそう思ってた」

この二人は今、なんて言った…？

「お、俺は…」

「但し、暴力はしないって誓えるならだけど」

「暴力なんかしても、全然強くなかなれないよ」

何故だろう…俺の中の何かが、こいつらと友達になりたいって思っている。

だからだろう。

「俺でも良いのか？」

「もちろん!」

俺はこいつらと友達になった。

この二人は、男は昌志、女は恵美という名前らしい。  
俺達三人は中学は違っていたため、必死に勉強して同じ高校に入  
ろうという話になった。

話をした次の日から、俺は学校へ行くようになった。  
全員驚いていたが無視だ。

俺は必死に勉強した。

二年間のブランクを埋めるように。

あった。

1024番。

合格だ！

昌志と恵美は…あった。全員合格だ！！

俺達は抱き合った。

そして、高校では三人みんないつも一緒にいた。

昌志、恵美…俺は…！

ひたすら走ったその場所にあったのは、廃ビル。

俺は再び走り、階段を駆け上がる。

そして戸を開け、外の空気と触れ合った。

## 2話17(前書き)

ようやく2話完結です。

## 2話 17

見えない。

ここは廃ビルの屋上。

下を見ても、夜の今は何も見えはしない。

「死ぬのか、俺」

誓いを破り、暴力をした。もつと良い解決策があったかもしれなかつたのに。

しかし、いざ死のうと思つと思ひ起こされるのは、葵や咲のこと。

葵…俺、もつとお前と話したかつた。

咲…お前と昔の話をしたかつた。

でも、俺に生きる資格などない。

「さよなら…」

俺はビルから身を投げた。

私は気がつくと、路上に座り込んでいた。

さっきの光景は、本物？彼が、ひ弱そうなあの彼が、暴力…？

信じたくない。

でも、目の前に転がる三村が、あれは事実であつたことを物語つている。

それよりも彼。

絶望した顔で走っていった彼。

そして、私の…

絶対に探し出して見せる。

山城葵は、自分自身に誓つた。

痛え。

生きてんのか…俺。

ちえ、死ねれば良かったのに。

まあ、このままこうしてりゃ、いつかはくたばんだろ…。

葵…咲…元気だな…。

「何死んだふりなんかしてるんですか！」

「あ、ああ…い？」

「私です！お願い！目を開けてください！」

「お、おいおい何泣いてんだよ…。」

「泣いてなんかありません！何であの日のこと覚えていないのに、この場所にいるのですか！」

「お前なにを…。」

意味不明だった。

葵は一体何が言いたいのだろうか。

ヤバイ…意識がもう…

「私はあの日からずっと…。」

その言葉を聞きとることは叶わずに、俺の意識は闇へと溶けていった。

## 2話―7（後書き）

次回から徐々に話が動き出す予定です。

### 3話 1

地獄。

そう表現するのが一番だ。なぜなら、この場は百もの死体で埋め尽くされているのだから。

只の旅行だったのに。何故こんなことになったのだろう。

父さん、母さん、姉さん…何処？僕はここにいるよ。

少年がどれだけ呼び掛けても、応えてくれるものなどその場には存在しなかった。

あの爆発から生き残ったのは、少年のみ。

何故分かったのか…それは、墜落二日目で周りには血とくさい何かしかないことを総合した結果。

少年は絶望した。

僕も死ねれば良かったのに。

寝たまま起きなかったね…一人も…。

わずか、五年前のこと。少年はまだ十二歳。

体中から鈍痛を感じながら、俺はゆっくりとその意識を覚醒させる。

見慣れた天井。そこから下がるシャンデリア。ここが、山城家であることの何よりの証明だ。

俺は昨日、自殺した。

正確にはしようとした。（葵は俺を助けたのか…？あんな場面を見た後だつてのに…）

体を起こす。すると、自分の脇にいる一人の少女に気がついた。

（葵…）

意識がぼんやりしてあまり覚えてていないのだが、俺は飛び降りた後、まだ意識が残っていた。ほっておけば死んだだろう。でも、おそらく目の前の少女が俺を助けたのだ。

「ううん…」

葵が目覚ましそうだ。俺はどうすれば…。

「死なないで…まだお礼してないよ…」

一体何のことだろう。

ただ、今の葵の表情は何かを恐れるかのような、そんな顔だった。守…死なないで…」

とたん、俺は、無意識に彼女を抱き寄せていた。この子を苦しめていたのは自分だ。自殺しようとしたことだ。

「ああ…絶対に死なない…。ごめんな…」

「うん…」

自分の死が、誰かを悲しくさせる…そんなこと微塵も考えていなかった。

あの時は、もう自分が嫌で、ただ、迷惑をかけたくて…。

「守…?」

俺はもう絶対に彼女を悲しませない。人間として、男として、神崎守として。

「あのさ、恥ずかしいんだけど…?」

「ん…?あ…ごめん!」

俺は慌てて飛び退く。

年頃の男女が抱き合っつていうのはさすがに不味い!葵、絶対怒ってるよな…。

しかし、目を瞑り腕で身を守る態勢の俺に、いつまでも葵の鉄拳制裁が下ることはなかった。

恐る恐る様子を伺うと、何やら頬をほんのり赤染め、少しうつむいていた。

まさか、

「葵…」



### 3話―1（後書き）

自分で思ってたことなのですが、ちょっと3話までテレビ分がほぼ  
なかったですよね。

これからはできるだけ増やしていきたいことと思っています。  
これからもよろしくお願いします。

### 3話 2

「体育祭？」

「そう、体育祭」

時刻は八時半。俺達学生は登校しなきゃならない。全く面倒だ。そんなことを考えていると、同居人、山城葵が話を振ってきた。

「んで？体育祭が何だった？」

「私、実行委員長だからお手伝いお願いね」

「断る」

「…いきなり抱きしめられた」

「喜んで手伝おうじゃないか」

「よろしい」

畜生！何であん時抱きしめちゃうかなあ、俺のバカ！

まあ、断る理由もないしな。別に手伝っても何ら問題は無いか。

「それじゃ、行こうか守」

「ああ」

何というか…葵から棘が消えたな。前は俺が一言喋ればツンツンした応えが返ってきたのだが。棘がないのも、それはそれで有難いのだ。でも、

「早く！置いていっちゃうよ？」

「今行く」

どうしちまったんだ…葵…。

（はあ〜）

山城葵は、心の中で盛大にため息をついた。

（もっとストレートなやり方はなかったかなあ…はあ〜）

本人には十分すぎるほど効果があったのだが、葵は気付いていな

かった。

(彼、七年前の彼とやっと会えたのに…。もつとストレートに、二人になりたいとか言えないの？自分で自分が嫌になるわ…) などと考えていると、すでに学校に着いていた。

「おっはよゝ守！」

そこに、転校生万丈目咲が現れた。

「え？咲、お前大丈夫なのか？昨日の…」

「あ…う、うん。大丈夫だよ。それに、嬉しかったよ。ありがとう助けてくれて」

「お、おう」

なに照れてんのよ!?

心の中で突っ込んだ。

(そういえば、昨日だって二人で楽しそうに歩いてたしなあ…)

私はそれを思いだし、少し落ち込んだ。

「そうだ、咲も手伝ってくれよ。体育祭の準備、大変そうだし」

「いいよ。…守がいるなら何だって…」

何て大胆な!?

あ、でも守首傾げてる。意味分かってないわ。絶対に。

「じゃ、私はここで」

私は五組なので、二人とは別の玄関から入るため、ここでお別れだ。

ていうか、準備の時に守と二人きりって計画だったのに。台無しじゃない！万丈目咲…やはり強敵だわ。

一時限目、俺はとても苦しい状況下にあった。

(ああ…落ち着かねえ)

何故か。それは周囲(主に男子)から殺気を感じるからだ。

(くっそあ…咲のせいだぞ…!)

話は登校時まで遡る。

(なんだかんだあつたけど、まだ三日目なのか…)

俺は、なんだか随分前からここにいるような気になっていた。

「おつはよ！みんな！」

咲、お前そりゃ元気過ぎだろ。後の俺はどう挨拶すりゃいいんだよ。そんなことを考えていると。

「早く入ろうよっ！」

「お、おい引つ張るなっ…」

咲に急に手を引つ張られた。意外に強い咲の力に驚いて、俺はついムキになってしまい、急停止したのだ。

すると、半ば走るように俺を引つ張っていた咲は、俺が急に止まった途端、逆にこっちに引つ張られてしまった。

咄嗟にした行動とは言え、自分で自分が恨めしい。何故、人数が揃い始めている教室で、こんなことをしてしまったのだろう。

俺は咲を抱きしめていた。

男子はほぼ揃っており、全員から疑いの目で見られた。

「誤解だ。みんな落ち着…」

俺は、必死に誤解を解こうとしたのだが、

「その…守？朝からはちよっと大胆だよ…」

あ、死刑判決が下った。頬を赤らめながらそんなこと言われたら、もう言い逃れできないじゃないか。

「おい、神崎」

「な、何でしょうか」

「みんながお前にお話が聞かせてほしいんだとき。ちょっと聞かせてくれないかな？」

「ははは。嫌だなあ、そんな面白い話なんてないよ？」

普段は大人しそう(二日間の観察より)な村岡君が、世にも恐ろしいファーストコンタクトをとってきた。うわ…ちよっと引いたぞ。

『神崎くうーん。僕ら話を聞きたいなあ』

今度はクラス全体が同調し、俺に迫る。こ、怖ええつ。

しかし、女神様は俺に味方をしてくれた。

キーンコーン、カンコーン。

「おら、朝のHR始めるぞ」

担任が教室に入ってきた。

『ちっ』

すると、さっきまで俺に詰めよっていた男達は、みるみるうちに霧散していった。

助かった。後はテキトーに逃げ回ってやる。

こうして、HR後に速攻で逃げ出し、今に至るわけだ。

ちなみに、あれから咲はずつと窓の外を眺めている。しかも、なんだか切なそうな顔をしているな。∴ほっといてやるか。

まもなく、一時限目終了のチャイムが鳴り響き、俺の逃走劇が再び幕を開けたのだった。

### 3話―3

「ふあああ」

昨晩は、珍しく俺は夜更かしをした。

昨日、体育祭の準備が終わったため三人で帰っていたところ、村岡君からメールがきたのだ。

そして、その内容は…。

（むふふ。まさか、あはんでうふふな本が手に入るとはな…。感動したぜ、村岡君）

まあ、要するに男が大好きであろう『あれ』を手に入れたのだ。

（こっちで買うと色々面倒だからな…）

俺は、店員に顔を憶えられたりしたら、気まずくてその店で買い物ができなくなってしまう、などの理由があれためそれを受け取ったのだ。

そして、夜更かしの原因は、それを眺めていたところ時間がかなり経過していたことだった。

まあ、ここに来る人なんてメイドさんくらいなので、取り敢えず、応急措置としてベッドの裏に紐でくくり着けておくことにした。

俺は思考を変え、食堂へ向かった。

「おはようございます」

「ええ、おはよう」

今、俺が挨拶した女性は山城緑。葵の祖母だ。

「今日はいつもより眠そうね」

「そ、そうっすか？」

「いえ、怒っているわけじゃないのよ。それに、むしろ一応こっちが無理矢理させている生活なのだから、自由なことをしても一向に構わないという考えなの」

な、なんて心が広いんだ。葵にもぜひ見習ってほしいね。

葵（咲もだが）なんか昨日帰っている途中に、俺が村岡君の呼び

出で引き返すから先に帰って欲しいと言ったら、

「はあ？」

って言って驚いたと思ったら、急にそっぽを向いて帰ってしまった。

俺が仕えるのが当たり前とか思っているのだろうか。俺は執事じやねえっての。

「おはよう」

「おはよう」

葵が起きて来た。

ん？なんか眠そうだな。あいつも夜更かし…？有り得ないな。

全員が揃ったので、朝食が始まった。うん、美味しいね。

「村岡君！！」

俺は教室へ入るなり、さっそく村岡君を捕まえ、お礼を言った。

「ふっ、礼ならいらん。お前が俺達と同じだと分かったからな」

か、カツコええ。エ 本のことなのに、その単語さえ出さなきゃこんなに格好いいのか。

「ちなみに俺の周りからの第一印象は『大人しい』だが、甘いな。

静かにしている時の俺は、脳内で自分だけの世界を構築し、楽しんでるんだ。表情を変えない訓練をした俺は無表情だからな。不気味がられることもない」

そんな技が！？

「村岡君、きみはいつたい？」

「ただ、趣味に命を捧げるだけのつまらん男だ。それと、俺のことは友人と呼んでくれ」

「ああ、これからもよろしくな友人！！」

そうして俺達は腕を組み、友情を深めた。

昼休み、俺は咲を誘って学食へ向かった。

「守が誘ってくれるなんてね…」

「え？なんか都合でもあったのか？」

「い、いや嬉しかったというか…」

「別に奢るわけでもないのに」

「いや、そうじゃなくて…」

「？」

奢ってもらえると思ったから喜んでたんじゃないのか。

「守ってさ…か、彼女とかつているの？」

「ん？ああ、いるわけねえだろ。だって俺だぞ？」

転校前は、地味の代名詞と呼ばれてたからな。俺から格闘をひくとそんなものだ。

「そつかあ…良かった」

いやいや、何がいいんだよ。くそお、高校生にもなって年齢〓彼女いない歴だなんて俺くらいだぞ。

絶対俺って将来独り身っぽいよな。

「咲は可愛いしな…モテるんだろ？」

「か、かわ…別にそんなことないよ！」

嘘だ。昨日だって妙にソワソワしてた男子に呼び出されてたしな。はあ。

食堂では、俺は好物のカレーライスを注文したのだが、何故かとても切ない味がしたのだった…。

### 3話－4（前書き）

遅れました。

連続投稿しますのでよろしくお願いいたします。

### 3話―4

俺、神崎守は現在所属部活動無し。まあ、要するに帰宅部だ。ちなみに、我が校は全員が必ず部活動に所属しなければならぬというものが校則にある。

というわけで今、呼び出し食らって職員室です。

「神崎い…お前なんかやりたいことないのか？」

「とくには…」

「ふうむ…」

特に部活はやるうと思っただけでなかった俺は、今更どこかへ入部しようかなどとは微塵も考えていなかった。

「まあ、幸い明日からは土日だ。ゆっくり考えてこい」

「はい…分かりました」

月曜日だったからお残り決定だな。良かった。

職員室を出て、俺は三年五組へ向かった。今日も体育祭の手伝いがあるからだ。

「よし、いっちょ頑張るか！」

三年生でも部活強制参加はおそらくうちだけだ。俺は、部活動が悪いとは思わない。だが、それでも俺はただ気ままに日々を楽しみたかった。

帰り道のこと。

俺はいつものように葵と咲と帰っていた。

「はあ、今日も疲れたな」

「そう？私はもう慣れちゃった」

咲。俺なんか力仕事ばかりでくたくたなのに。お前ずっと企画練ってただけだったじゃん。

「そういえば、明日さあ隣町の遊園地が開園するんだって。守、一緒に行かない？」

ほう。なかなか楽しそうだな。

「コホン、私実は駅前に美味しいケーキ屋さんを見つけたんですけど、守、一緒に行きませんか？」

はあ？何で咲が先に提案したのにわざわざそんなことを？

『守！』

「は、はひ。何でしょうか」

『どっちに行くの？』

「ええと…」

うわ。怖え。どっちを選んでも処刑決定だな。

それなら…

「わりの。明日はさ、友人と買い物行くんだ…」

まあ、逃げるためだからな。仕方ない。

しかし、葵は納得したみたいだったが、咲はなんだか怒っていた。

「おい。何怒ってたんだよ」

「怒ってない」

咲は葵の方を気にしながらそう言った。

「葵、先に帰ってて貰えるか…？」

「何故です？」

「なんつうかな…話づらそうな感じだからな…」

そういうと、一度頷き、葵は帰っていった。

「さて、さっきのことだが…」

「その前に聞きたいことがあるんだけど」

咲は俺の問いかけを途中で遮り、そう聞いてきた。

「約束…覚えてる？」

「いつの？」

「あの場所でのこと」

咲と約束…？

ん…なんか…すぐそこまで思い出しかけてるんだけど、思い出せ

ない。

「忘れちゃったの？」

「すまん……」

「っ……！」

俺が謝ると、咲は走って帰ってしまった。表情は分からなかった。だけど、分かる。

（俺は泣かせてしまったのか……）  
本当に最低なヤツだな。俺は。

## 4話―1（前書き）

連続ですみません。

あと一話投稿します。

守編次回で完結です。よろしくお願ひします。

## 4話 1

「やめて！はなしてよ！」

あれ？これは夢なのか…。

「さきちゃん！！」

あれは…。あの子は、昔の…俺だ。

俺は、自分より大きい子ども達三人を目の前に、まったく怯むことなくそう言った。

「さきちゃんをはなせ！」

「やだね。すなばをひとりじめしたばつだ！」

砂場…。

「まもるくん！」

そうだ、俺が来たちょうどその日、妙に大きい子ども達が公園に来て…。

「いつも、いつもすなばをつかいやがって…じゃまなんだよ！」

そう言ってジャ アンくらい大きな子が咲の腹を蹴る。

「うっ…」

咲は気絶した。女の子にあんな蹴りを…許せない。

「くそ…ひどいよ。なんでやったんだよ！」

「うるさい！おまえもこうしてやる！」

それを合図に、さっきまで咲の手を押さえていた二人が、突如俺に襲いかかった。

当然、敵うはずもなく、俺はただ殴られ続けた。

あの時、咲は起きていた。俺はそれが分かっていた。だから、逃げるための時間稼ぎになるようにと…。

咲は逃げた。だが、俺を見て、涙を流していたんだ。

今日は土曜日、今日は学校の都合で休みだ。

俺はする事がなかったの、取り敢えず夢に出てきた公園を探すことにした。

今は公園だけが、咲との唯一の繋がりに思えたからだ…。

## 4話 12

日が暮れてきた。

九月上旬の今日はまだ少し蒸し暑かった。

だけど、どれだけ暑かろうと、俺から溢れる液体が止まることはなかった。ベタベタしてとても気持ち悪い。

はつきりとしなない意識の中、最後に見たソレの色は赤色だった気がした。

土曜日、俺は朝から公園を探していた。

どれだけ探したのだろう。辺りはすでに真っ赤だった。

「帰るか…」

俺が帰ろうとした時だ。ふと、自分の視界に気になるものが入ってきた。

女の子が男の子三人に囲まれ、街の方まで歩き出した。というより、歩かされていた。

(なんだか、無理矢理連れていかれてるって感じだな)

俺は嫌な予感がして、そいつらをつけていった。

連中がむかついた場所は街のど真ん中を通る道路。ここから他の街へ分岐するため、おそらく一番大きな道路だ。そんなところで何を

…?

俺の疑問は次の瞬間解決された。女の子が道路に押されることで。

「な!？」

今は家に帰るドライバーが多い。だから、もうすぐそこまでトラ

ツクが来ていた。

「うおおおお！」

俺は全力で走った。女の子を抱き抱える。そこまでは良かった。だが、トラツクがすぐ後ろに来ていた。

（間に合わない！）

俺は背中にとんでもなく大きなエネルギーの塊を受けた。

俺は女の子を抱えたまま弾き飛ばされる。

目の前にはガードレール。俺はそこに突っ込んだ。

女の子を守るように、背中から

私は落ち込んでいた。

今までソレのために生きてきたようなものなのに。あの人はソレのことを忘れていた。

でも、仕方がない。

あれからもう十年だ。覚えてたなら逆にすごい。

ああ。月曜日はどうやって彼に謝ろうか…。

私はのそんなことを考えながら、街一番の道路の脇を歩いていた。

（なんだろう…あれ…）

道路の真ん中に人だかりが出来ていた。気になった私は確かめに行くことにした。

アア、痛い。

俺八背中カラ突ツ込ンダハズナノニ、何故頭カラ血ガ流レテイルノダロウ。

ソウカ、頭ヲ打ツタノカ。

咲…ゴメン。今更思イ出シタヨ。アノ日、交ワシタ約束ヲ。

俺、咲ノコトが好きダツタ。

アノ日、大キイガキタチカラ咲ヲ守レナクテ、守リタクテ、鍛工  
タノニ。結局自分ハ弱イママデ。マタ、泣カセテシマツタ。

俺ハ…俺ハ…。

「守…！」

「サ…咲…！」

ハハ。死又直前ニ好キナ女ノ子ノ幻想を見ルダナンテ、ナンテイ  
イ死ニカタナシ。

「サ、咲…！」

「何？」

タトエ、ソレガ幻ダトシテモ、俺ハ伝エタイ。

「結婚…シテホシイ」

「…！」

「ゴメンナ…今更思イ出シタヨ…。俺ハ約束シタノニ…！」

「ありがとう。思い出してくれたんだ…っ…私も…好きでした。ず  
つと…。…っ結婚しよう。だから」

早く目を開けて…！！

最後ニ見タモノハ己ノ血ダツタ。

最後ニ聞イタノハ、愛シイアノ子ノ声ダツタ。

〜神崎守の手記より〜

私は、何故か金持ちの世話になることになりました。

だから、今までの自分を思い出せるようにする意味で、この手記  
を残したいと思います。

私は七月九日生まれ。あと二日早かったらなと悔やんでいた。そんな誕生日。

三歳の頃から叔父の家に通うようになる。

五歳の時、叔父が何処かの家の婿養子になる。以後毎年一回遊びに行く。

咲ちゃんと出会う。友達になって良く遊んだ。

七歳の時、田宮小学校へ入学。

十二歳の時、家族旅行に出掛けた。事故により、家族を失う。

翌年から気に入らないヤツは殴り始めた。その年から叔父の元へは行ってない。

十五歳の時、昌志と恵美に出会う。人生が変わった。以上です。

追記

俺は咲を守れなかった。だから、今度は絶対に守ろう。

暴力は嫌いだ。でも、何のために鍛えたのか。それは咲のためだ。約束を覚えていなかったのは俺だ。だから俺が悪い。

謝ろう。あの子に。

俺はあの子が好きだ。この気持ちを伝えたい。

告白したいから。尚更謝らないといけない。

もし、こんな俺が咲のそばにいてもいいのなら、守るだけじゃなく、幸せにしてやりたいって思ってる。

それが俺の

END

## 4話―2(後書き)

守編完結です。

応援ありがとうございました。

次回からは葵編です。

よろしく願います。

俺、神崎守は現在所属部活動無し。まあ、要するに帰宅部だ。ちなみに、我が校は全員が必ず部活動に所属しなければならぬというものが校則にある。

というわけで今、呼び出し食らって職員室です。

「神崎い…お前なんかやりたいことないのか？」

「とくには…」

「ふうむ…」

特に部活はやるうと思っただけでなかった俺は、今更どこかへ入部しようかなどとは微塵も考えていなかった。

「まあ、幸い明日からは土日だ。ゆっくり考えてこい」

「はい…分かりました」

月曜日だったらお残り決定だな。良かった。

職員室を出て、俺は三年五組へ向かった。今日も体育祭の手伝いがあるからだ。

「よし、いっちょ頑張るか！」

三年生でも部活強制参加はおそらくうちだけだ。俺は、部活動が悪いとは思わない。だが、それでも俺はただ気ままに日々を楽しみたかった。

帰り道のこと。

俺はいつものように葵と咲と帰っていた。

「はあ、今日も疲れたな」

「そう？私はもう慣れちゃった」

咲。俺なんか力仕事ばかりでくたくたなのに。お前ずっと企画練ってただけだったじゃん。

「そついえば、明日さあ隣町の遊園地が開園するんだって。守、一緒に行かない？」

ほう。なかなか楽しそうだな。

「コホン、私実は駅前に美味しいケーキ屋さんを見つけたんですけど、守、一緒に行きませんか？」

はあ？何で咲が先に提案したのにわざわざそんなことを？

『守！』

「は、はひ。何でしょうか」

『どっちに行くの？』

「ええと…」

ううむ…。咲には悪いが、日頃から葵には世話になってるしな。

俺がなんか役に立つなら…。

「ああ、なんかケーキ食べたいなと思ってたんだ。サンキュー、葵」

「え？ええ……その、た、食べたかったなら良かったです…」

「？」

どうしたんだ？葵のヤツ。妙に齒切れが悪いな。

俺が首を傾げると、

「わざとじゃないから憎めないのよね…」

咲が意味不明なことを囁いていた。女の子の特有の言語か？理解できないな。あい きゃんと あんだーすたんど。

こうして、俺は明日、駅前のケーキ屋に行くことになった。

ex11111 (後書き)

守編いかがでしたでしょうか。

彼は、自分の強さはある一人の女の子のために造り上げてきたものだということを、守れなかった時になって気付きます。勿論彼はそれを後悔します。

そして、最後に彼はこの世を去るわけなのですが、これではバッドエンド。誰一人幸せにはなっていません。

これは、あのとときの行動を少し変えていたら…という私の理想の話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3618r/>

---

あの日この場所で

2011年4月11日16時25分発行